

第一章 大間町の自然環境

第一節 位置と地形

一 位置と面積

本州の最北端 大間町は、青森県下北半島の西北端の突出部、本州最北端に位置する町である。町の東側は風に位置する町 間浦村、南東は大畑町、南西は佐井村と接し、西から北は津軽海峡に面している。南側の山岳地帯は、下北半島の山々の中では低いものだが、折り重なるように連なって、佐井村、大畑町、風間浦村へと続く。町の形は、大正八年（一九一九）に作成された大間町の前身、大奥村の『大奥村誌』によれば「地形畧不^{ほぼ}等辺三角形ニシテ」と、その村域を記しているが、北端の大間崎と大畑に接する南端を長径とした楕円形に近い町域をなしていると見た方がいだろう。その広がり、東西五キロメートル、南北一四キロメートルあり、町域の総面積は五一・九六平方キロメートルとなっている。

津軽海峡に面する海岸線は延長一五キロメートルに及ぶが、その北端に大間町の象徴ともいべき大間崎がある。この地点は、北海道の南端 松前半島の白神岬より約三〇キロメートルも北に当たり、「ここ本州最北端の地」の碑が建てられている。また、この突端から津軽海峡の水路約六〇〇メートルを隔てた北方沖に大間崎灯台をいただく弁天島がある。鳥居島とも呼ばれるこの島は、周囲約四キロメートル、東西約一二六メートル、南北約一

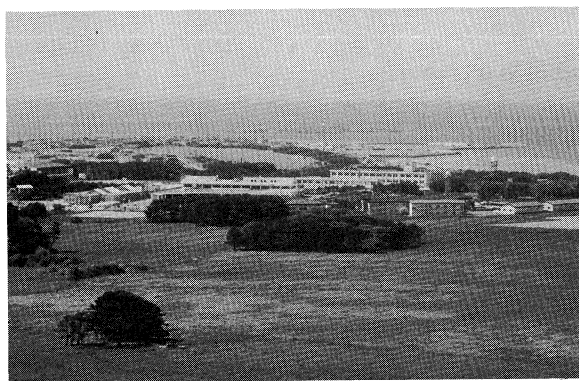


写真 1-1 内山から大間崎・北海道を望む

七六メートルの全島が岩石によって成っていて、『新撰陸奥国誌』によれば「岩の高きところ五丈、東を大フト、西を汐口、南をカカリ、北を沖の間という」と記されている。そして、その中央にそびえる灯台は、塔身が二五・五メートルあり、この地点を大間町の経緯度の基点、東経一四〇度五八分、北緯四一度三分としているのである。緯度でみれば、イタリアのナポリ、スペインのマドリッド、アメリカのニューヨークなどと、ほぼ同じ線上にあることになる。

大間崎を頂点として、太平洋側を下ると風間浦村、津軽海峡側を下ると奥戸、材木を経て佐井村に隣接する地形は、地図の上から眺めただけでも、この大間町が本州の最北端の厳しい環境にあることを実感させる。

対岸の北海道 下北半島は、つい近年まで青森県の「陸の孤島」と呼ばれ、**最も近い町** ばれる位置にあった。その形状から「マサカリ半島」の異名のある下北郡の一角は、特にマサカリの頭部に当たる西北部への交通便がほとんどなく、その北端に位置する大間町はもろろんのこと、隣接する佐井村、風間浦村も、県都からは隔絶された地域であったといっている。

昭和四十三年（一九六八）に、大間崎一帯の海岸線と弁天島周辺が下北半島国定公園の指定を受け、昭和四十五年（昭和四十四年十二月四日、函館市・野辺地町間国道指定）に国道二七九号線が、下北半島への分岐点である野辺地町から最北端の大間町まで全面舗装による「むつはまな

第1節 位置と地形

図1-1 津軽海峡全区

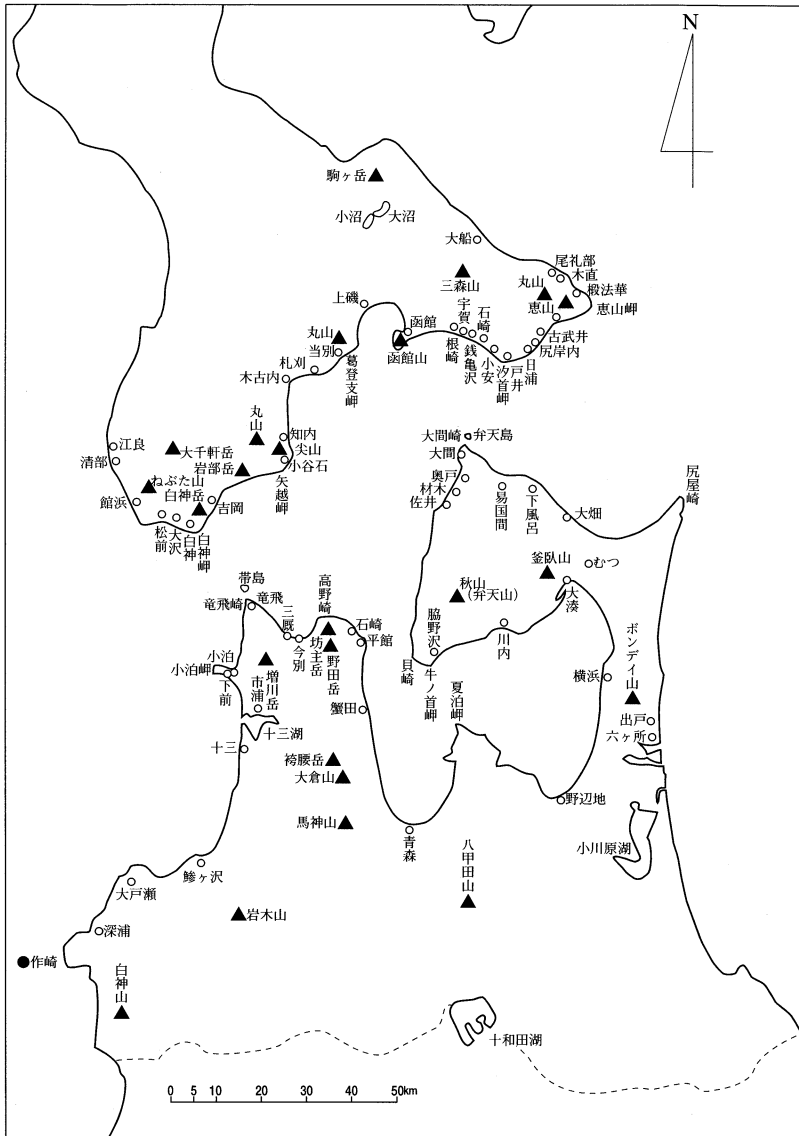




写真1-2 就航中のフェリーボート「ばあゆ」

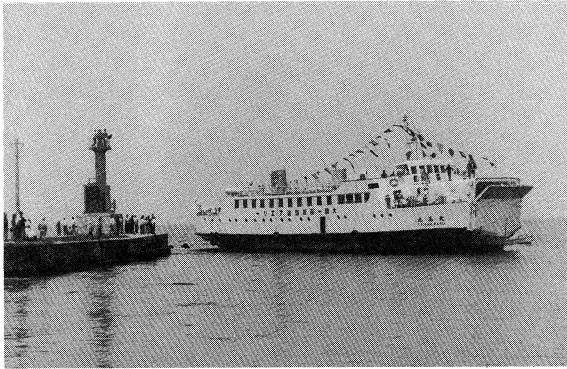


写真1-3 大間港に初入港する大函丸

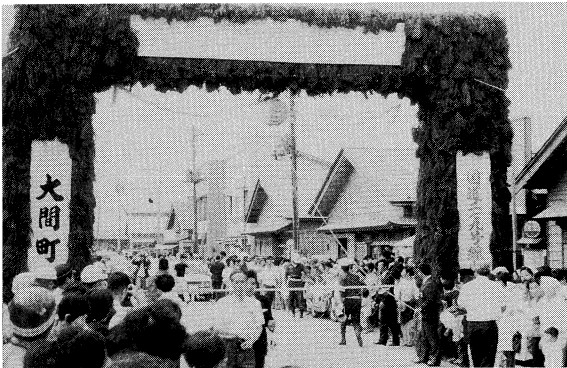


写真1-4 むつはますライン開通式

すライン」として完成したとはいふものの、鉄道は大畑町までしかなく、公共交通機関としてはバスが唯一である。その代わり、海を隔てているとはいへ、大間町は北海道渡島地方の亀田半島と相対し、函館市に三五キロメートル、対岸の戸井町汐首岬までは、わずか一七・五キロメートルに位置している。そのため、陸路より海路の方が先に発達し、昭和三十九年、フェリーボートが就航して以来、大間町は本州と北海道を結ぶ海上ルートの拠点となった。当時は、カーフェリーが函館市・戸井町・室蘭市の三ルートに次々と就航したが、現在は北海道南部

最大の都市である函館市に一時間半で行くことができるから、必然的に北海道、特に函館市との経済・文化の影響を下北の各地より強く受けることになる。

このことは、現代に入って始まったことではなく、歴史的に見ても古代から、北海道と下北半島の大間地区との深い関係が読み取れる。

大正四年（一九一五）の大間尋常高等小学校の副読本となっていた『大奥村誌』によれば、「海上拾四町一章ノ水ヲ隔テ函館港ト相對ス」と明記され、「海運ノ便アルヲ以テ、日用ノ米粟等輸入ヲ仰キ、幸ニシテ乏シカラザルヲ得タリ、本村ハ則チ半島北方ノ尽頭ニ在リトイエドモ、旧北海道ノ道路ニ係リ、当時較賑盛ノ地タト云フ」と、いかに北海道との交流が深かったかが強調されている。

二 地形と海岸線

低い山々と 大間町が位置する下北半島の西北部は、そのほとんどが山地と海岸線によって占められている。

小さな河川 もともと下北半島の山地には、それほどの高峰はなく、半島の最高峰、釜かま臥ふせ山やまでさえ八七九メートルにしかすぎないが、その峻峻さには定評がある。

特に南西に隣接する佐井村域には、この地域の最高峰である大作山（七七六・三メートル）、荒沢岳（六七一・六メートル）、アンド山（六四五・七メートル）、縫ぬい道ぢう石山しやま（六二六メートル）、湯ノ沢岳（五五七・七メートル）など、峻峻な山々が分布するが、大間町域に入ると流家戸山ながいげとやま（三三六・四メートル）、三界平山（三四六メートル）、大滝山（五六三・四メートル）、折戸山（二一九・一メートル）などと、急に低くなった山容を見せる。

しかし、奥戸地区の東南にある大滝山は、佐井村の荒沢山、大畑町の右衛門四郎山、風間浦村の目滝山に連なり、材木地区の南にある材木山は、北に延びて岩穴・高山の二支峰を出し、新釜・八森の高原を走って津鼻崎に連なる起伏の激しい山であることには変わりがない。また、姿の美しい山としては、奥戸地区の南にある黒岩山や天狗山、大間地区の東に位置する西吹付山にしよふつけまなどがある。いずれも標高二〇〇メートルにも満たない低い山だが、特に天狗山は、扇を逆さにしたような美しい稜線を見せ、古くから航海者の指標とされてきた山である。

河川にも大河といえるものはない。その中で一番大きなものは、奥戸川である。大滝山にその源を発して西北に流れ、小川代山から発する小川代川を合わせて奥戸湾に注ぐ。長さは八・七キロメートル程度のものである。これに次ぐのが材木山を源とする材木川で、約四・七キロメートルの清流が材木地区の北端に沿って材木湾に入る。このほか、大間地区の中央を貫流して大間湾に注ぐ大間川、材木山の支峰赤石山から赤石湾へ注ぐ赤石川、黒岩山と天狗山から発して黒岩湾に注ぐ黒岩川、大間内山から小奥戸湾に入る小奥戸川、大間内山から西に流れて大間町と風間浦村の蛇浦地区の境界を流れる垂水川たれみずなどがある。

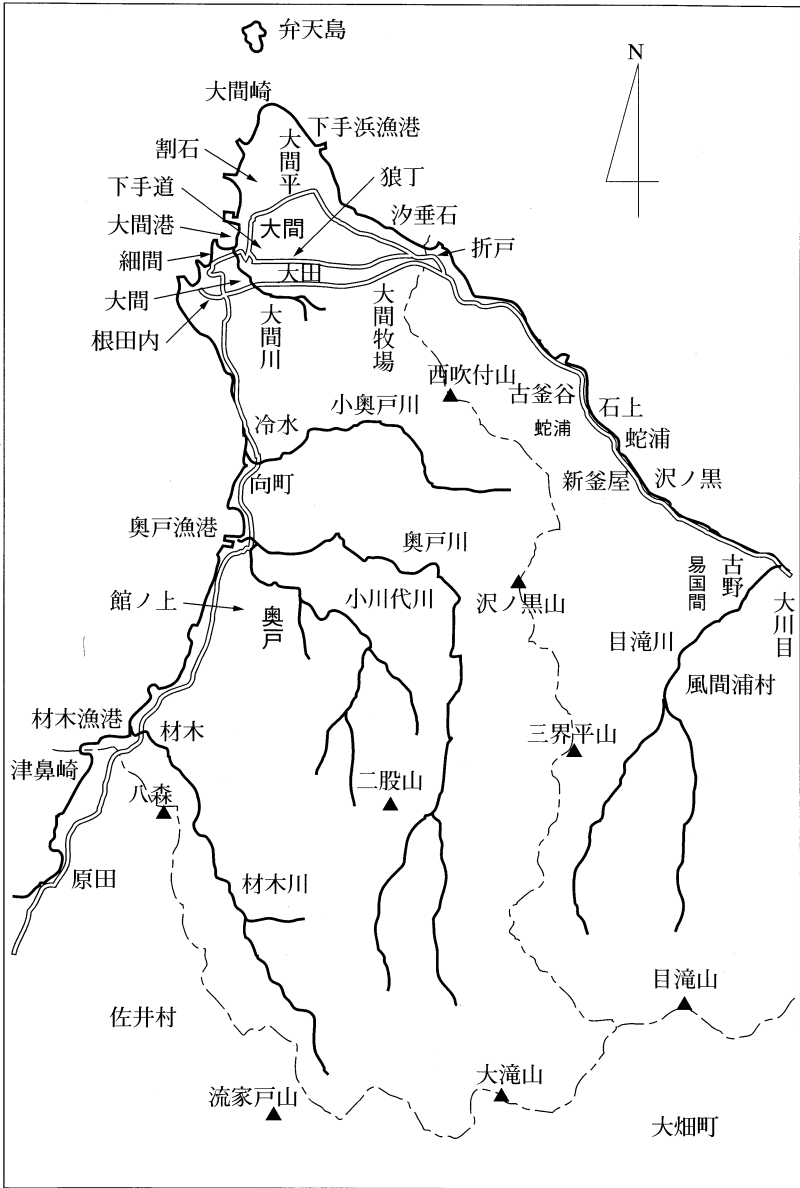
延々続く 大間町の南西に隣接する大畑町から大間崎へ向かう海岸線と大間崎から佐井村へ向かう海岸線に**海岸段丘**は、延々と続く階段状の地形——海岸段丘が発達している。一番高い段丘は、大間町と風間浦村

の境界付近にある赤平段丘と呼ばれるもので、その標高は一五〇〜一七〇メートルにも及ぶ。

また、奥戸地区付近に展開される段丘は、奥戸高位段丘と呼ばれる六〇メートル前後のものと、それより低い奥戸中位段丘がある。高位段丘の方はそれほど長く続いていないが、中位段丘は北海岸一带にわたって延々と連なり、非常に平らな面を持っている。標高は大体三〇〜四五メートル程度で、大間平と呼ばれる牧場地もこの段丘の上にある。さらに低い奥戸低位段丘は、奥戸川や材木川、原田川などの河川の谷沿いに発達し、海岸段丘

第1節 位置と地形

図1-2 大間町管内図



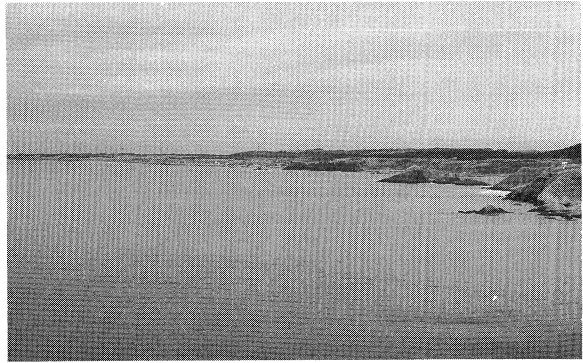


写真1-5 奥戸沖からの遠景（海岸段丘）

というより、河岸段丘と呼ぶべきものである。このように、大間町の一五キロメートルに及ぶ海岸線は、高低さまざまな段丘によって、その地形の特徴が形作られている。

これらの段丘は、いつの時代に形成されたかについては定かではないが、一〇〇万年前からの氷河時代と温暖な間氷期の海水面変化や土地隆起などの要因によって形成されたものと考えられている。氷期には、水が氷雪となって陸地に堆積し、間氷期には、これが溶けて海に運ばれることから海面が大きく変化する。氷期には海水面が一五〇メートルも低下し、間氷期には六〇〜一〇〇メートルも上昇する時期があったといわれるから、両期の間には海水面は二〇〇〜二五〇メートルもの上下変動をしたことになるわけである。

大間地域の段丘は、五〇万年前以降に、土地隆起と海面変化の中で、海に浸食されて形成されたものと考えられているが、どの段丘がどの時代に形成されたかについては、今後の研究を待たなければならない。

岬の数々と しかし、大間町の海岸線を彩るものは、段丘だけではなく。町のシンボルともいえる大間岬をは
 広大な原野 じめとする「崎」と「岬」の数々が、国定公園にふさわしい魅力を倍加している。

『大奥村誌』の地勢概要によれば、「大間岬ノ南方三十町ニシテ根田内崎アリ佐井村界ヲナス津鼻崎ト相對シテ奥戸湾ヲ抱擁シ其ノ間ニ赤岩・黒岩ノ二岬アリテ各々一小湾ヲナセリ」と数々の「岬」と「崎」を紹介している

が、中でも大間崎に勝るとも劣らない名勝の地として知られる津鼻崎は、大間町を象徴するもう一つの顔である。『大奥村誌』にも「材木崎ハ別名八森崎ト称シ海中ニ斗出スルコト七町三十間、尽頭岩礁削ルガ如シ、其東八町ニ材木岩層アリ、高サ四十尺材木ノ化石セシモノニ似タリ、村名ノ因テ起リシ所以ナリ」と記されているように、大間町の集落の中で、もともと古い材木地区の地名発生にも欠かせない崎である。

もう一つ大間町の地形を語る上で忘れてはならないものは、各地に点在する広大な原野である。これも『大奥村誌』で大正八年（二八一九）当時のもので見ると、「広漠ノ原野中大字奥戸ノ二ツ石平八百四町歩余、小奥戸野八十六町歩余、焼畑平六十二町歩余ニシテ、其他館ノ上、黒岩新釜、八森等二十余町歩ノ原野アリ、大字大間ニ八根戸内野九十二町歩余、七郎平百二十三町歩余、大間平二百十六町歩余ノ原野ナリ」とある。

一町歩は大体一万平方メートルだから、一〇〇万平方メートルを軽く超す広大な原野が大間町にはゴロゴロあったのである。これらの原野は明治・大正期から戦時中にかけて、その一部を国防用地として陸軍省に編入された。戦後の開発によって微減しているとはいふものの、今なお、その大部分が原野のままで残されている。

先に述べた大間町の総面積五一・九六平方キロメートルのうち、七〇%以上を国有林などの山林が占め、段丘に広がる田畑と原野を合わせた約二五%がそれに次ぐ。そして、海岸沿いの大間・奥戸・材木の三地区の集落は、宅地としては全部合わせても一%にも満たず、公共施設や神社仏閣などが残りを占めているのが大間町の現状である。

三 地質と火山岩

多彩な火成岩 大間町の一帯の地質はさまざまのものを挙げる事ができるが、『大奥村誌』では「本村ノ地から成る地質 質ハ火山岩ニシテ大間ハ概シテ軟岩層厚ク百尺余ニ達スルモノノ如シ」とだけ、簡潔に記されている。

しかし単に火山岩とはいっても、宇曾利湖を中心とする恐山山地や、燧岳ひるたけを中心とする佐藤ヶ平山地が第四紀の火山であるのに対し、大間・佐井地区の西部山地の大部分は、新第三紀の火山碎屑物から成っていて、流紋岩・安山岩・玄武岩・花崗閃緑岩などの多彩な火成岩のほか、古代層と考えられている数多くの堆積岩が見られる。

大間崎の海岸に行くと、すぐに目につくのが緩く傾斜して海に没している黄褐色の地層であるが、これを調べてみると、その中心を占めるものが新第三紀の深い海の中に堆積した硬質頁岩けつがんと呼ばれる岩石であることがわかる。そしてこの岩石の上に、軟らかい泥岩や凝灰質砂岩の地層も積み重なっていて、海綿動物や珪藻けいそうの化石なども含まれている。これらの地層は、いわゆる大間層と呼ばれ、大間町一帯に分布しているものである。大間崎から津軽海峡の狭い水路を隔てて浮かぶ弁天島は、すべて流紋岩と呼ばれる岩石から成っているが、これもおそらくこの大間層の中の岩脈だろうと考えられている。

また、大間崎から東側海岸沿いに、二キロメートルほどの地点にある汐垂石しおたれにも、大間崎と同じような硬質頁岩の傾斜した層が分布しているが、この海岸には玄武岩の岩脈も見ることができ。

材木地区の海岸一帯に見られる材木岩と呼ばれる火成岩は、表面が風化して淡褐色を示しているが、新鮮面を

間層は三〇〇〇万〜一五〇〇万年前のいわゆる新生代中新世期に三〇〇メートル級の深海で生成されたものとみられ、奥戸集塊岩層は、一五〇〇万〜七〇〇万年前に数百メートルの海底火山の噴出物が堆積したものと考えられている。

材木・弁天島・垂水たねみずなどの火成岩類は、大間層・奥戸集塊岩層に溶岩が貫入してできたものであり、垂水の黒褐色頁岩は、このときの熱作用を受けて硬質化したものとみられる。その硬度によって、石器としても利用された火成岩といわれている。



写真1-6 赤石海岸の岩



写真1-7 津鼻崎の岩

出してみると、青灰色〜灰白色を呈する斑状の石英安山岩であることがわかる。この石英安山岩は、易国間いこくま火山岩類と呼ばれ、北海岸の風間浦村易国間地区を中心に分布している溶岩や火山噴出物の積み重なった地層の一部に当たるもので、見事な柱状節理の発達した部分があり、大きいものでは径一メートルにも達する。

いずれにしても、大間地域の基盤岩は、大間層と呼ばれる頁岩層で、これに奥戸集塊岩層が重なり、さらに火山灰質砂礫さだまから成る野辺のへ地層も重なるという多彩な地層を形成している。大

第二節 気象と海流

一 気 温

下北半島 下北半島は、あらためていうまでもなく、四面を海で囲まれている。東側は太平洋、北側の津軽の陸と海 海峡、西側北部の津軽海峡と西部の平館海峡、そして南側と半島頸部西側の陸奥湾である。また半島全体の陸地面積も小さいことから、普通全国規模でいう海岸部と内陸部という分け方は、あまり適切ではないが、気温分布の面から見ると、次のように分類される。

- ① 下北半島の東側海岸部Ⅱ太平洋型
- ② 下北半島の西側海岸部Ⅱ日本海型
- ③ 恐山から西側の山岳部Ⅱ山岳型
- ④ むつゝ川内の陸奥湾ぞいⅡ平地型

つまり下北半島という一地域の中に四つのタイプの気温分布があり、青森地方気象台・大間局地農業気象観測所の観測データから、次のようなことが実証されている。

一月から三月までの三か月と九月から十二月の四か月の計七か月は、太平洋型と日本海型の両海岸部は、山岳

型や平地型の内陸部より気温が高い。これは陸地の温度の変化より、海水の温度の変化が緩やかなため、秋から冬にかけては海水の温度が高くなり、海岸部はその影響を受けることになる。

五月から七月までの三か月はその逆で、陸地の温度の上昇に対し、海水の温度の上昇が緩やかなため、内陸部の方が海岸部より高温となる時期である。そして残りの四月と八月は、双方の移り変わりの時期として海岸部と内陸部の気温は平均する。

同じ海岸部でも、太平洋型の東側海岸部は寒流の影響を受け、日本海型の西側海岸部は暖流の影響を受けるから一定ではない。つまり、東側海岸部は西側海岸部より年間を通じて気温が低くなる。

このようなことから大間町は、下北半島の中で「夏は涼しく、冬は暖かい」地域であるということがいえるかもしれない。平成元年（一九八九）以来、青森県全体が一部を除いて暖冬傾向が続いているが、大間町はその中でも温暖な地域であることは、表1-1のとおりである。

もちろん、海水と陸地温度の変化だけが下北地方の海岸部と山岳・平地部との温度差を決定するわけではない。夏や冬の季節風も、下北半島各地の気温に大きな影響を与える。夏は温度の低い太平洋からの風が東側海岸部に吹き付けるし、冬は温度の高い日本海からの風が西側海岸部に吹くということも、西側海岸部が東側海岸部より年間を通じて高温であることの大きな条件だろう。

冬暖かく 下北半島全体のこのような気温分布からみると、わが大間町は下北半島の中で、他の西側海岸部**夏涼しく**の町村とともに「冬は暖かく夏は涼しい」地域だということがいえる。

『大奥村誌』によれば、「東北西ノ三面海ニ臨ミシ内地の極北ナルヲ以テ寒サ甚シク検温器ノ華氏盛夏最高八十一、二度、酷暑十一、二度ニ……」という記述があるが、大間・大畑・脇野沢・川内の各農業気象観測所の観測

表1-1 月別平均気温(℃)

平成7年

地名\月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
大間	-0.4	0.9	2.7	7.6	12.2	13.9	20.1	22.3	18.9	14.9	8.1	2.8
むつ	-0.7	-0.3	1.8	8.0	13.0	14.3	20.9	22.3	17.9	13.4	6.9	1.6
小田野沢	-1.3	-0.3	2.0	6.9	11.5	13.0	19.5	21.4	17.8	13.9	6.9	1.7
脇野沢	-1.2	0.9	2.3	7.5	12.3	14.3	20.8	22.0	17.7	13.9	7.4	2.4

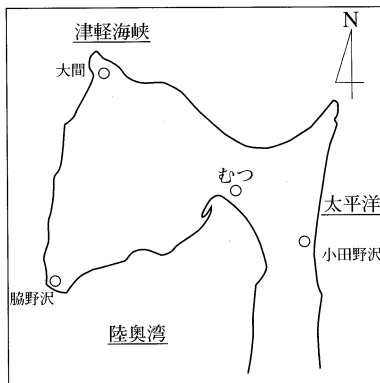
平成5年

地名\月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
大間	1.0	0.7	3.5	7.3	10.9	14.0	16.1	19.2	18.2	12.9	8.3	2.7
むつ	0.1	0.0	2.6	7.1	11.8	14.5	16.4	19.1	17.4	11.5	7.4	1.6
小田野沢	0.3	0.1	2.6	7.0	11.2	13.2	15.0	18.3	17.5	11.7	7.5	1.8
脇野沢	0.7	0.5	2.8	6.9	11.4	14.3	16.4	19.0	17.6	11.9	8.1	2.1

平成3年

地名\月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
大間	1.7	0.1	2.6	8.2	12.3	16.4	19.0	20.3	19.4	14.3	7.7	2.5
むつ	0.6	-0.2	1.9	8.4	13.4	18.2	19.3	20.2	18.7	13.6	6.5	1.5
小田野沢	0.5	-1.1	1.8	7.6	12.1	16.4	18.1	19.3	18.3	13.4	6.3	1.1
脇野沢	0.8	-0.5	2.1	7.8	12.6	17.9	19.1	20.1	18.7	13.8	7.0	2.1

青森県地域観測資料による



データによれば、大間町の気温が他の町村に比べて、冬の気温が高く、盛夏は低いという数字が示されているのである。もちろん例外もないわけではないが、月別平均気温を見る限り、大間町・佐井村の両地区の数字は田名部や脇野沢と比べて、冬暖かく、夏は涼しいことを如実に物語っている。

確かに酷暑の季節に大間崎に立ち寄った観光客は、その寒さに驚き、土地の者の肌にもその厳しきは変わりがないが、温度計の数値は、比較的しのぎやすい極北の町・大間町の意外な一面を示しているのである。

(なお、観測ポイントである大間局地農業気象観測所は、原子力発電所立地予定地点ならびに大間崎灯台、アメダス観測地点と比較した場合、大間町内でも内陸の平坦地に位置し、次に述べる風向・風速とも比較的穏やかな地点であるところから、大間町で実際に体感する気象条件からは多少穏やかなデータとなっている)

二 風向きと風速

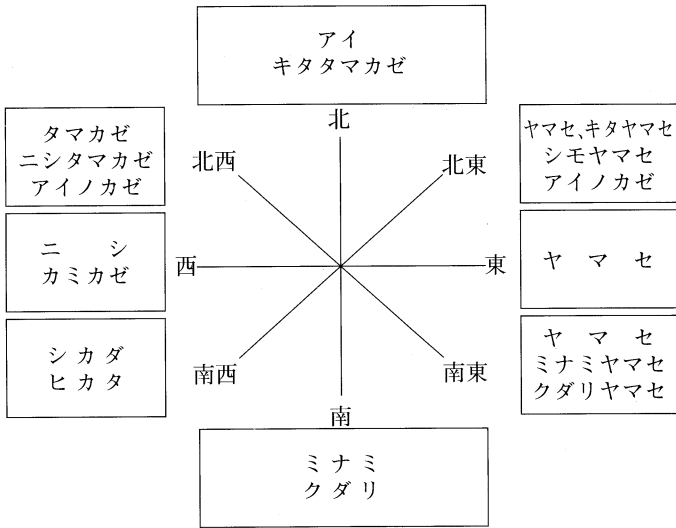
西風と東風と 大間局地農業気象観測所の月別風向別日数表によると、**南西風が多い** 年間を通じて最も多い風は西風（ヒカタ）であり、続いて東風（ヤマセ）、南西風（クダリヒカタ）の順になっている。

一番多い西風は、十月から三月にかけて最も多く吹く季節風で、脇野沢村やむつ市の海では船を出すのに都合のいい風だが、川内町や大間町では



写真1-8 ヤマセ雲

図1-3 風の方位別呼び名



「ヒカタの風が吹くと大シケになる」と、漁師たちに恐れられている風でもある。次に多い東風は、四月から八月にかけて多く吹く季節風であり、同時に暖かさを運ぶ南西風もこの時期に多い。そして、この西風と東風、南西風の三者だけで、年間の三分の二以上を占め、残りの三分の一を北西風（タマカゼ）、北東風（シモカゼ）、南東風（ミナミヤマセ）、南風（クダリ）、北風（アイ）がわずかずつ分け合っている。特に南風と北風は極端に少ない。

季節を追って概観すると、三月には西風と春を運ぶ南西風と東風が多く、四月に東風を主役に南西風と西風、五月には東風と西風の間には北東風がやや多く入り、六月から九月までは、さまざまな風が入り混じる。そして十月からは西風を中心に戻り、二月まで北から西にかけての風が月の大半を占めるようになるのである。

六月の梅雨期には、月のうちのほとんどが東風と南西風で占められ、九月の台風シーズンには、それぞれの風がほとんど同じぐらいの日数で複雑に入り乱れて

第2節 気象と海流

表1-2 月別平均風速 (m/s)・最多風向

平成7年

地名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
大間	3.8 W	2.8 W	2.3 W	3.5 WSW	3.0 ENE	2.6 E	2.5 SW	2.5 WSW	2.5 WSW	2.2 W	4.6 W	3.4 W
むつ	3.2 NW	2.8 W	2.7 NNW	3.3 SW	3.2 SW	2.6 ESE	2.7 SSW	2.7 SW	2.7 NNE	2.3 NNE	4.2 WSW	3.1 NW
小田野沢	3.5 WNW	2.6 WNW	2.7 WNW	3.5 W	3.0 WSW	2.6 SE	2.5 WSW	2.7 SE	2.5 W	2.4 W	3.9 W	3.0 WNW
脇野沢	2.3 WNW	2.0 WNW	2.3 NW	2.4 WNW	2.4 WNW	3.2 ENE	1.7 WNW	2.0 WNW	1.6 NW	1.7 NW	2.2 WNW	2.3 WNW

平成5年

地名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
大間	3.9 W	4.0 W	3.7 WSW	3.7 WSW	3.0 ENE	2.9 ENE	2.7 E	2.8 E	2.7 E	3.5 WSW	3.7 W	4.4 W
むつ	3.2 W	3.3 W	3.4 SW	3.8 SW	3.1 SW	3.0 SSW	2.5 ESE	2.8 ESE	2.8 ESE	2.9 WSW	3.4 W	3.4 W
小田野沢	3.1 W	3.1 W	2.6 W	1.6 W	1.3 SE	3.2 SE	2.7 SE	3.2 ESE	3.3 SE	3.1 W	3.4 W	3.8 W
脇野沢	3.3 W	3.4 W	2.8 W	2.8 WNW	2.2 WNW	3.2 ENE	3.9 ENE	3.4 ENE	3.3 NE	2.4 WNW	2.8 WNW	3.1 WNW

平成3年

地名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
大間	3.6 W	3.5 WNW	3.8 WNW	3.3 WSW	2.7 WSW	2.6 SW	2.3 E	2.1 E	2.5 W	2.9 W	4.1 W	3.6 W
むつ	3.1 NW	3.3 WNW	3.3 W	3.5 SW	3.0 WSW	3.1 NNE	3.0 SE	2.5 SE	2.7 SW	3.1 SW	3.1 WSW	2.6 NW
小田野沢	3.7 WNW	3.5 WNW	3.5 W	3.7 W	3.3 W	2.7 SE	3.0 SE	2.7 SE	3.0 W	3.3 W	3.0 WNW	2.5 WNW
脇野沢	2.9 W	3.0 W	3.3 W	3.0 W	2.5 WNW	2.8 WNW	3.5 E	3.3 E	2.9 WNW	3.3 W	2.8 W	2.8 WNW

青森県地域観測資料による

吹くことも、はっきり数字に現れている。

冬には強く 風速についても、大間局地農業気象観測所の月別風向別平均風速表を眺めてみよう。年間、最も吹く偏西風 少ない北風と南風は、いずれも風速二メートル前後で、最大でも五メートル級と弱いものであることがわかる。そして、この両者よりは頻度の多い北東・南東の風も、強く吹くことはまれであり、あまり問題になるような風ではない。

東風は二番目に頻度の多い風で、ときとしては強く吹くが、平均風速にするとやはり三メートル前後となり、春から夏にかけては重要な意味を持つ風だとはいっても、強さにおいては穏やかといっているであろう。しかし、脇野沢村の九艘泊では、秋のヤマセはミゾレを伴って真っ向から吹き付けてくるので、沖へ出た漁船が難儀すると恐れられている。この東風と同じように「大シケのときのタマカゼ」と、東通村尻屋で恐れられている北西風は、頻度こそ低いが、秋から冬にかけては、明らかに強く吹いていることがわかる。

一番多い西風と三番目に頻度の多い南西風も平均すると五メートルにも満たない風速となるが、やはり秋から冬にかけては強くなり、総合的にいって、春から秋にかけてはいずれの風も弱く、冬を中心とする秋から春にかけては、偏西風が強いというのが大間地区の実情である。

これまで述べてきた風向きと風速は、陸上の地形によって大きく左右されるものだが、大間は地形に左右されない土地といわれ、西風・東風・南西風が年間を通して多く吹き、それぞれの風に合わせて漁師たちは操業を続けているのである。

三 雨と雪

梅雨より多い 大間局地農業気象観測所の資料によると、下北半島の降水量は、春から夏にかけては、太平洋

九月の降雨量 岸の東側海岸部が西側海岸部に比べて降水量が多くなっていることがはっきり示されている。

しかし九月に入ると、これが逆転し、日本海側の西側海岸部の方の雨が多くなり、特に大間町は、隣村の佐井村より多い二〇〇ミリに達する降水量を記録する年が多い。六月の梅雨期でも、大体一〇〇ミリ程度が普通だから、九月にはその倍の量の雨が降るとみていいだろう。九月という月は台風のシーズンであるばかりでなく、特に下北半島のような狭い地域では、気象状況の変動が多い月だが、大間町においてはほとんど毎年変わることなく、多量の降水量を記録しているのである。

十月に入ってから、そして十一月から一月の冬の季節にも、梅雨期に匹敵する降水量が記録される場合が多いが、下北半島全体からみると、十一月から三月までは西側海岸部より内陸山岳部の降水量が多くなっていく。

風向きの項でも述べたように、東風が多く吹く四月から八月までの季節は、梅雨期も含めて大間町の降水量が比較的少なくなるのは太平洋岸の東側海岸部への降水量の増加という現象で納得できるが、西風の多い一月から三月、そして十月から十二月の時期に、どうして日本海側の大間町や佐井村の降水量が多くなるのかと疑問視する人たちもいる。しかしこれは、比較的穏やかな東風が上陸すると、温度の高い地表によって上昇気流となり、たちまち雨雲となるために太平洋岸の東側海岸部の降水量が多くなるのである。ところが西風の場合は、日本海の湿気を運んでくるとはいうものの、山岳部に突き当たってから上昇し、雨になるよりは雪になるため、西

表1-3 月別降水量 (mm)

平成7年

地名\月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
大間	44	39	124	102	174	26	98	249	185	103	73	55
むつ	107	56	78	126	167	37	102	154	137	95	76	51
小田野沢	63	61	94	147	184	69	112	161	160	101	30	41
脇野沢	97	40	76	125	154	48	110	179	125	127	60	93

平成5年

地名\月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
大間	84	121	35	67	54	181	113	151	101	53	87	137
むつ	91	171	53	71	93	206	118	132	122	85	82	161
小田野沢	69	134	25	58	104	208	136	180	176	93	74	126
脇野沢	46	99	23	78	66	142	137	96	151	43	86	85

平成3年

地名\月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
大間	27	93	31	54	28	54	212	230	90	115	41	69
むつ	85	137	49	79	47	60	206	180	105	153	62	90
小田野沢	×	×	35	46	40	72	246	238	111	160	34	48
脇野沢	71	111	38	62	45	69	256	221	107	87	77	90

青森県地域観測資料による

側海岸部の降水量は多くなならない。

降雪も積雪も少ない町 十二月から三月までの月別積雪量の表を見ても

えばれるように、むつ市と脇野沢村に比べて、大間町と佐井村の積雪量は段違いに少ない。長い歴史の中で例外なく、これと同じような状態が続いているのであり、雪の少ない下北半島西側海岸部の表情をはっきりと表している。

地形と降雪の関係からこうなるわけだが、激しく吹き付ける西風が規模の小さな下北半島西側山岳部に突き当たると、そこから上昇して雪になるものの、そのまま西側海岸部の大間町や佐井村に降るのではなく、さらに風に乗って佐井村の山々を越えて、むつ市や川内町・脇野沢村のむつ湾側に大量に降り積もるからである。

『大奥村誌』によれば、「降雪八十一月初旬ヨリ始マリ四月中旬ニ至ルモ其量多カラズ蓋シ烈風ノ飛散スルニヨル」とあるが、山が海岸から離れて位置する大間町や佐井村は、その地形と風の強さによって、文字通り雪は飛散してしまうのである。

四 海流と潮流

二つの流れ 大間町の海流と潮流については、原子力発電所の電源立地地域温排水対策事業の「大間町漁村地域の強い影響 域振興計画策定業務報告書」に非常に綿密な調査データがある。海流に関しては、科学技術庁研究調査局による「津軽暖流域に関する総合研究報告書」が参考にされているが、非常にわかりやすく大間町の海象が説明されているので、その一部を紹介しよう。

大間町はあらためていうまでもなく、津軽海峡を挟んで北海道に面している。この津軽海峡の潮流は、主流線上では上げ潮流は東方に、下げ潮流は西方に向かう。しかし実際には東方への一方流である。ただ月が南北回帰線付近にある数日間だけ、下げ潮流が最強になり、その一時期だけ西流になる。これは西から東に向かう恒流（津軽暖流）の勢いが強いため、潮流の大勢はこの潮流に支配されているため、東方への一方流となってしまうのである。

また、大間崎と津軽半島の竜飛崎たつびざきとを結んだ線以南には、時計回りの還流区域があり、同以北の主流線の勢力が弱いときには還流の勢力が拡大し、流速も弱くなる。

このように、大間周辺の海流は、大きく二つの流れの影響を受けているということがいえる。一つは大間崎の

北側および東側の津軽海峡の強い流れの影響を受けている区域、もう一つは、大間崎より西側の海域で、比較的に流れの弱い還流の影響を受けている区域である。つまり大間崎を境として、大間町の海は全く違う表情と内容を持っているということになる。

海流と潮流の 日本列島の海流を見ると、九州の南方で黒潮暖流から分かれた対馬暖流が本州の日本海沿岸に**漁業への影響** 沿って北上してくる。そして津軽海峡の西口の南西で対馬暖流から分かれた津軽暖流が津軽海峡に入ってくるわけだが、この津軽暖流は海峡を出たところで、北海道東岸に沿って南下してきた親潮寒流に出合うことになる。

津軽暖流は、津軽海峡の西口から東へ向かって進むが、この流れは下北半島側が優勢で、北海道側は親潮寒流に押されて、ややその勢いが衰える。また海流は、沿岸の地形によっても、その動きが左右される。つまり海流は直進しようとするが、沿岸の地形にくぼみがあると、そのくぼみに回り込んで逆向きの流れとなるわけである。さらにまた津軽暖流は、津軽半島に沿って陸奥湾に流れ込み、下北半島に沿って流れ出している。

以上のような海流の動きが下北半島の気象条件を規定する一つの要素になっていると同時に、津軽暖流と親潮寒流の季節ごとの消長が下北半島全体の漁業に大きな影響を与えているのである。

潮流はいうまでもなく、潮の干満によって起こる海水の動きである。この潮流の流向と流速も、沿岸漁業と密接なかわりを持っている。寄せては返す波といわれるように、潮流は、ほぼ一定方向とそのほぼ正反対方向の二つの流向を持ち、一つの方向の流れが始まると、次第に流速を増し、最大に達すると減速して静止し、今度はほぼ逆の流れに変わり、これを繰り返すのである。この潮流の向きが変わることを転流というが、転流と転流までの時間は平均すると六時間一二分かかるといわれる。

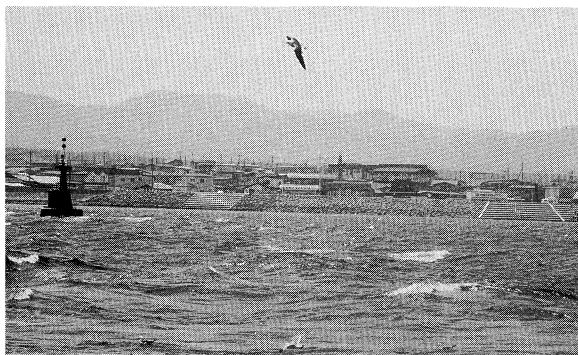


写真1-9 大間崎クキド瀬の潮の流れ

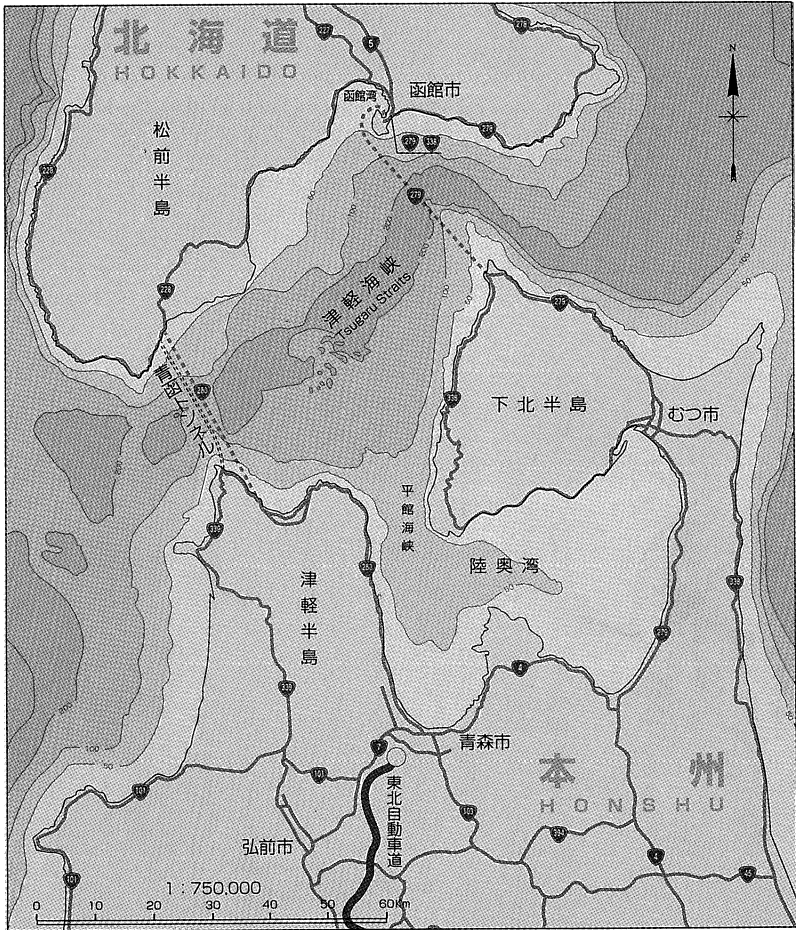
潮の干満によって潮流が決まり、潮の干満は月齢によって決まるので、潮流の流向は旧暦によって知ることができ、流速も新月と満月の一三日後の大潮のとき最大となり、弦月のころの小潮の時期に最小となる。このような潮流の動きを大間町の漁業関係者は、常に頭に入れて漁に励んでいるのである。

海底地形と 津軽海峡の海底地形は、北海道側が比較的緩やかな傾斜で**海水の温度** あるのに対し、下北半島寄りに急激な傾斜面が存在する。

大間崎から汐首岬に面する断面を見ると、大間崎から北方約五キロメートルの沖合までは、比較的緩やかな傾斜を持った大陸棚となっているが、水深一〇〇メートル前後の地点から急激に深くなり、水深二四〇〜二八〇メートルの海底谷となる。一方、北海道側の汐首岬沖合からは、緩やかな大陸斜面が水深二八〇メートル台の海底谷に接続する地形となっている。この急激に深い部分は、大間崎沖から尻屋崎の北にかけて海峡を東西方向に溝状に横断する地形をなしている。

また、下北半島と津軽半島、松前半島に挟まれた水深二〇〇メートル前後の地点には三角形の盆地状の地形が広がっており、その西側に二つの深い部分があつて、その最深部が平坦になっているところから「海釜^{うみかま}」と呼ばれている。大間崎から奥戸、材木、そして佐井村方面にかけては、水深一〇〇メートルぐらいまでは緩やかな傾斜の地形が続いてから急に深くなっている。

図1-4 津軽海峡の海底地形図



第2節 気象と海流

表1-4 奥戸地先の水温の推移

平成7年日平均值

単位(℃)

水温		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
日平均值	1日	10.42	7.27	7.73	8.88	—	—	15.42	21.71	24.55	20.87	17.18	13.88
	2日	10.16	7.46	6.84	8.26	—	—	15.73	21.74	25.11	20.89	15.67	13.81
	3日	10.20	7.74	7.15	8.12	—	—	15.50	22.04	24.55	20.40	14.80	13.13
	4日	11.31	8.28	8.05	7.85	—	—	15.54	22.43	23.08	20.94	15.29	13.74
	5日	11.27	8.23	7.98	8.50	—	—	17.19	21.77	23.32	20.93	15.56	14.13
	6日	9.95	8.59	8.25	8.70	—	—	16.86	22.03	23.64	19.57	16.19	13.94
	7日	8.53	8.35	8.09	8.99	—	—	17.34	21.85	23.58	19.16	16.64	13.37
	8日	8.94	7.31	8.23	8.45	—	—	18.43	22.07	23.88	19.91	15.96	13.11
	9日	10.83	7.31	8.09	8.76	—	—	18.64	22.16	23.52	20.19	14.95	12.26
	10日	9.23	8.12	8.44	8.54	—	—	17.58	22.52	23.67	20.15	14.34	11.59
	11日	7.65	7.68	8.59	8.31	—	—	17.77	22.33	23.25	20.24	16.43	12.38
	12日	7.50	7.83	8.51	8.68	—	—	19.04	23.44	21.76	20.36	14.90	11.83
	13日	8.35	8.09	8.57	8.36	—	—	18.98	22.66	22.12	20.41	15.96	11.04
	14日	8.15	7.56	8.74	8.86	—	—	19.71	22.24	22.98	20.30	16.66	10.66
	15日	8.06	7.86	8.78	9.16	—	—	19.51	23.82	23.15	20.28	16.58	11.57
	16日	9.36	8.40	8.81	9.13	—	—	13.65	19.44	24.20	22.94	20.15	14.61
	17日	9.69	8.56	8.84	9.20	—	—	14.13	18.75	23.93	23.05	19.66	14.51
	18日	10.39	7.58	8.41	9.16	—	—	14.25	19.90	23.51	22.61	19.35	14.72
	19日	9.10	7.38	8.38	—	—	—	14.18	20.23	23.83	22.46	19.37	15.17
	20日	8.76	7.95	8.25	—	—	—	14.08	20.04	24.55	22.29	19.39	15.80
	21日	9.63	8.19	8.35	—	—	—	14.70	20.65	24.65	22.30	19.67	14.67
	22日	9.89	7.89	8.43	—	—	—	15.00	20.55	24.55	22.42	20.19	15.10
	23日	10.19	8.02	8.67	—	—	—	14.62	20.66	24.24	22.41	19.90	15.41
	24日	9.18	7.32	8.96	—	—	—	14.26	20.42	24.13	22.04	19.78	14.95
	25日	8.45	7.77	8.96	—	—	—	14.69	19.68	24.55	21.91	19.19	13.51
	26日	9.32	7.86	8.86	—	—	—	14.79	20.15	24.47	21.80	17.68	13.49
	27日	8.43	7.53	8.81	—	—	—	15.45	20.88	24.73	21.55	16.99	13.01
	28日	7.65	7.24	8.76	—	—	—	15.42	20.63	24.47	20.43	17.91	12.18
	29日	8.87	—	8.85	—	—	—	15.34	21.03	24.70	20.68	17.93	12.97
	30日	8.39	—	8.88	—	—	—	15.56	21.43	24.98	20.97	18.29	12.97
	31日	7.06	—	8.89	—	—	—	—	21.56	24.52	—	18.03	—
半旬平均值	1	10.67	7.80	7.55	8.32	—	—	15.87	21.94	24.12	20.81	15.70	13.74
	2	9.49	7.94	8.22	8.69	—	—	17.77	22.12	23.66	19.80	15.62	12.85
	3	7.94	7.80	8.64	8.68	—	—	19.00	22.90	22.65	20.32	15.91	11.49
	4	9.46	7.97	8.54	9.16	—	—	14.06	19.67	24.00	22.67	19.58	14.96
	5	9.47	7.84	8.67	—	—	—	14.65	20.39	24.42	22.22	19.75	14.73
	6	8.29	7.54	8.84	—	—	—	15.31	20.95	24.64	21.09	17.81	12.92
旬平均值	上	10.08	7.87	7.88	8.50	—	—	16.82	22.03	23.89	20.30	15.66	13.30
	中	8.70	7.89	8.59	8.86	—	—	14.06	19.33	23.45	22.66	19.95	15.43
	下	8.82	7.73	8.77	—	—	—	14.98	20.69	24.64	21.65	18.69	13.83
月平均值		9.19	7.83	8.42	8.66	—	—	14.67	19.01	23.38	22.73	19.62	14.97

平成6年

水温		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
半旬平均值	1	9.83	8.88	7.83	8.11	9.35	13.90	16.85	21.49	25.17	21.82		
	2	9.80	8.36	7.95	8.42	10.20	13.91	17.48	22.81	25.60	21.60		
	3	10.17	7.70	6.83	8.34	11.00	13.93	18.88	24.00	24.10	20.82		
	4	9.00	7.64	7.25	8.86	11.39	15.35	20.13	23.44	23.22	19.73		
	5	9.05	8.20	7.92	9.47	12.47	14.05	19.29	22.35	23.15	19.50		
	6	9.34	8.37	7.73	9.81	12.95	15.30	20.23	23.75	22.51	19.06		
旬平均值	上	9.82	8.62	7.89	8.27	9.78	13.91	17.16	22.15	25.39	21.71		
	中	9.59	7.67	7.04	8.60	11.19	14.64	19.51	23.72	23.66	20.28		
	下	9.21	8.26	7.82	9.64	12.73	14.67	19.80	23.12	22.83	19.26		
月平均值		9.53	8.18	7.59	8.84	11.28	14.41	18.86	23.00	23.96	20.38		

海水の温度については、電源開発株式会社大間原子力総合立地事務所の調査「大間周辺海域を中心とする海況の推移」によると、大間崎周辺では平均最高水温が八〜九月の二二度C台、平均最低水温が二〜三月の六度C台となっているが、大間西側固定点の三メートル層水温の経年変動の概況を見ると、年によって、水温の高低が微妙に変化しているのがわかる。

「電源立地地域温排水対策事業報告書」（青森県）によれば、平成六年（一九九四）および七年の奥戸地先底層水温の詳細は表1-4のとおりである。

第三節 大間町の動物

一 哺乳類

大間町奥戸川 哺乳類は、弱肉強食の動物の世界では最も進化したグループだが、馬や牛、豚、山羊^{やぎ}、羊など上流での調査 のように、人間に労力を提供したり、食肉用とするために飼育される哺乳類、また、犬や猫などのペット的存在の哺乳類動物は、ここでは問題にはならない。ここで取り上げるのは、自然のままの野生動物として、大間町に生息している哺乳動物である。

しかし、野生の哺乳類の生態を知ることには容易なことではない。昭和四十一年（一九六六）から大間町奥戸川上流では継続的な調査が行われ、さまざまな情報が報告されているが、これには、調査に適する積雪期に動物たちの足跡をたどり、糞や食跡を調べ、その寝場所を突き止めるなどの苦労が続けられる。奥戸川上流では珍しい哺乳類の捕獲例も多く、大間町の近隣町村の地域を含めて、数々の野生の哺乳類の生態を知るメッカとなっている。

中でもツキノワグマ・カモシカ・ニホンザルの大型哺乳動物が生息し、自然環境の関係で、その生息密度が一定に保たれていることが注目され、特にニホンザルとカモシカは、天然記念物および特別天然記念物に指定されている貴重な存在である。



写真1-10 ニホンカモシカ

このほか、ノウサギ・リス・ムササビ・モモンガ・アカネズミ・ヒメネズミ・ハタネズミ・ヒミズ・キツネ・キテン・アナグマ・エゾイタチ・コエゾイタチなどが、奥戸川上流の調査でその生息が確認されているが、厳しい気候条件の下、これらの動物に対する保護が大きな問題としてクローズアップされる。そして、この地の動物保護は主として、森林が保存され得るか否かにかかっているとみてよいだろう。

大間町に生息する哺乳動物 一口に哺乳類といっても、それは食肉目・霊長目・偶蹄目ぐうていなどさまざまな種類に分けられる。大間町奥戸川上流で調査され、大間町周辺地区で生息しているとみられる哺乳類の主なものを各目別に列挙してみると、次のようになる。

食肉目||ツキノワグマ・タヌキ・キツネ・テン・イタチ・コエゾイタチ・アナグマ

霊長目||ニホンザル

偶蹄目||カモシカ

げっ歯目||リス・ホンシユウモモンガ・オウシユウムササビ・ヤマネ・トウホ

クヤチネズミ・ハタネズミ・ヒメネズミ・アカネズミ

うさぎ目||トウホクノウサギ

翼手目||コウモリ

食虫目||カワネズミ・ホンシユウヒズミ・アズマモグラ

食肉目のコエゾイタチは別名をイイズナといい、奥戸川上流で足跡が確認され、川内町では捕獲された例がある。同じエゾイタチは一般にはオコジョと呼ばれるもので、これも奥戸川上流で足跡が確認されたほか、長後では人々に目撃されている。

げっ歯目のハタネズミ・ヒメネズミ・トウホクヤチネズミ・アカネズミなどは、奥戸川の上流で捕獲されていて有名になったが、同じネズミでも食虫目に入るホンシユウトリガネズミとジネズミは生息の可能性があるとはいわれるものの、まだ確認されていない。

いずれにしても、大間地域に生息するこれらの哺乳類は、すべて貴重な野生動物であり、その生息はまだ完全に知られていないものが多く、今後の調査・観察が期待される。

二 北限のサル

二重の北限、 世界中には約二〇〇種類のサルがいるといわれる。その大部分は、アフリカ・インド・東南アジアの**下北のサル** ジア・中南米など、熱帯を中心とした地域に生息しているが、その中で一番北にまで及んでいるのがニホンサルと呼ばれる種類のサルである。そして日本列島に生息するサルは、ニホンサル一種類であり、その中でも一番北に棲^すんでいるのが下北のサルなのである。つまり世界中のサルの中で北限に生息するサルがニホンサルで、その中でも下北のサルが最北にいるため、二重の意味で北限のサルということができる。

下北地方には、大きく分けると大間地区を中心とした北部に数集団と、脇野沢地区を中心とした南部に数集団のニホンサルが生息していたが、平成七年（一九九五）現在では、生息地域が広がって下北半島西部の山々全域に生息している。大間周辺のサルは三重の意味で北限のサルということもできそうだが、脇野沢周辺の集団の離れザルが大間周辺に混じり込んだり、その逆のケースがあつたりして、血が混じり合っているため、下北のサル全体が北限のサルと考えた方がいいといわれる。

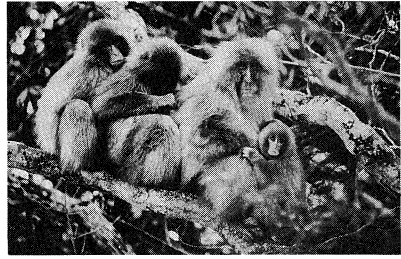


写真 1-11 北限のサル

また最近、この下北のサルは非常に特異な存在であるということが注目を集めている。というのは、下北のサルの遺伝子を調べたところ、原始的なアカゲザルの遺伝子が非常によく保存されていることがわかったからである。アカゲザルというのは、大陸のサルの元になっているサルで、アカゲザルからカニクイザルやタイワンザルが分かれ、さらにニホンザルが分かれてきた。これまでは日本列島に大陸から渡ってきたニホンザルの群れが大きくなって分裂し、長い時間をかけて下北半島にまでやってきたと考えられていたが、遺伝子からみると、下北のサルは、大陸から一直線に下北をめざしてやってきたと考えざるを得ないという状況になってきているのである。

これらのことは、今後の研究が解明してくれる諸問題を数多く残しているが、下北のサルが二重の意味での北限のサルであることを示すばかりではなく、ニホンザルの分布の中心地から、かなり早い時期に分かれて下北の地にやってきたことを推測させる。

下北のサル 非常に貴重な存在である下北半島のサルについては、京都大学霊長類研究所員として大間町に住む **の行動範囲** み、昭和四十八年（一九七三）から調査を続けている足澤貞成氏の研究によって、次第にその行動範囲や生態が明らかになってきている。

先にも述べたように、下北半島のサルには大間を中心とした一塊と脇野沢を中心とした一塊とがあり、脇野沢の方のサルは人家や畑に出没するので、よくテレビなどでも紹介されているが、大間を中心に佐井村、大畑町までの範囲にいる北の方のサルは、出合うことも少なく、発見しても素早く山の中を移動していくので、ほとんど

報道されることもなく、その生態を知られていなかった。

その行動範囲を見ると、昔は古佐井川から奥戸川、易国間川にかけて行動していたものが、最近は大佐井川から大畑川流域にまで広がっている。そして山の中をどのように動き回っているかという点、前に通ったルートを何度も通るといふことはせず、少しづつ違えるように動き、山の尾根や沢の一つ一つを細かに見分けて利用していることがわかってきた。このように行動すると、食物によく出合うことができるし、食物自体を減ぼすこともない。例えば、重要な食物であるヤマグワなどは、木の一本一本の場所まで覚えていて、この木は以前に食べたか食べていないかまで知っているように事細かく行動しているという。

また、大間を中心としたサルの一塊にはいくつかの群れがあるが、それぞれの行動範囲が広いために、めつたに他群と出合うことがなく、たまに出合っても喧嘩することもなく、近くで争わずにいたり、一緒に行動したりすることもわかってきた。これが脇野沢の方のサルだと、行動範囲が狭いため、毎日のように顔を合わすので、勢力の強い群れが弱い方を追いかけて回したりして喧嘩することも知られ、生息する場所の条件によって、群れと群れとの関係も違ってくるようである。

それぞれの群れの縄張りについてはまだよくわかっていないが、一つの群れが特によく使う場所に他の群れが入り込むというようなことはめつたになく、それぞれの群れが固まって利用する場所はある程度確保されているとはいうものの、周辺に広がると、群れと群れとの縄張りは大きく重なっているように思われる。

サルの食物 サルが冬に食べる餌は、木の皮や冬芽である。下北半島には一六八種の樹木があるといわれるが、**と栄養状態** そのうち一一一品目余りの木の皮や芽がサルたちの食物となっていて、多量に食べるものと少量しか食べないものがあるとはいうものの、非常に多種多様な食生活をし、わずかししか食べないものも生薬的な

役割を果たし、サル健康を守っているように思われる。

また、その食べ方を見ると、他の動物と同じように強い者がいい場所ではいっぱい食べるが、よくしたもので、木の枝先は細いため、弱い存在である子ザルしか登っていけない。つまり、太陽光線に近く、栄養の多い枝先の皮や芽が食べられるわけである。強いオトナのサルたちは体重が重いので、太い幹の厚い皮を食べるしかなく、ちようどうまい具合に平均して強者にも弱者にも食物は行き渡るようになっていて、このようなことから野生のサルには病気が少なく、弱いものも強いものも、いろいろな種類をよく食べ、平均した体力維持をしているという感じがいえそうである。

しかしサルは、人間のように栄養学的に考えて食物を取っているわけではない。どんな理由で何を食るかという問題となると、やはり、おいしいか、おいしくないかの基準で食物を選ぶことになる。脇野沢周辺の畑に出してきたサルがトウモロコシやジャガイモを食べる場合、おいしくなければ、すぐに捨てて次々に口に合うものだけを食べ、それが食物の状態が一番いいものであることを知っているわけである。

人間は少し古くなったものや腐りかかったものでも、無理して何とか食べようという工夫をするが、サルはいつでも、一番おいしい状態にある食物を食べるといっていいたくな生き物であり、いろいろ多種を食べるといことと、一番おいしい状態にある旬しゅんの物を食べるといことが、サルの栄養のバランスを取るといことであり、健康維持の背景であるといえるだろう。

気温の問題

サルの生息に重要な意味を持っている気温は、マイナス四度だという。というのは、マイナス四度以上だとマイナスの気温でも雪の表面は溶けるが、マイナス四度以下になると、雪は溶けずにサラサラの状態になる。するとサルの足の裏には毛がないので、雪の上を歩くと雪が足の裏にへばりつく。これ

が冷たくて嫌なため、サルは雪の上を歩かなくなる。

サルなのだから木から木へ渡って移動すればいいという見方もできるが、下北のサルは移動する場合、雪の上を歩き、木伝いに移動することはほとんどない。また移動するのは日中だけで、夜間は動かないので、マイナス四度以下の寒さが続くと、サルの移動範囲は小さくなり、極端に行動が制約されることになる。これはサルが北海道に住めるか住めないかという条件にもかかわってくる問題であり、気温マイナス四度以下がどれだけ続いてもサルの生息のカギを握っている気温だといえるだろう。

また、サルは冬の間、できるだけ天然林を利用して人工林には入らないということもわかってきた。昭和三十年（一九五五）代から四十年代にかけて、ブナ林などの天然林が伐採され、スギ林に変えるなどの人工林の造林計画が広く進められたが、そこにはサルたちは全く入らなかった。いろいろな種類の木がいろいろな年齢層にわたって混じり合っている自然の山が、サルに限らず、多くの動物にとっては住みよい山なのである。

最近では、大面積皆伐、一斉人口林化の方針も変えられて、いい木だけを抜き切りにする単木択伐が進められ、小さな木はそのまま残し、太陽光線が存分に入り、自然に樹木が育つようになってきているので、いずれは下北のサルたちにとっても住みよい自然林が増えていくことになりそうである。

サルの寿命と増加する頭数 下北に生息するサルは、日本の南の方のサルに比べて短命ではないかと考える人も多いようだが、そんなことはない。脇野沢のサルでは三〇年ほど生き続けた例があるし、大間のオスサルでも二五歳ぐらいまで群れにいて姿を消したのもしれば、雌ザルの中でも、そのくらい生きた例がある。二五歳から三〇歳という年齢は、日本の南方に生息するサルの寿命に決して引けを取るものではないという。

頭数もだんだん増加する傾向にある。昭和四十年（一九六五）代から五十年代にかけて、一一〇〜一三〇頭ぐ

らいが生息しているのではないかと考えられていたが、最近ではその倍、二五〇頭ぐらいいるのではないかと推測されている。行動範囲の山々の木は伐採されて、食物は以前に比べて減っているにもかかわらず、サル頭数は増えているわけで、木を切るといふことと、数が増える増えないといふことは直接の関係はないようである。そして昭和五十年ごろには三群しかいなかった群れも、今では一〇群ぐらいになっている。一群当たりの平均頭数は、かつては三〇〜四〇頭程度であったが、現在では一〇頭程度から七〇頭ぐらいまでさまざまであることがわかっている。その集団も、リーダーの下に厳しく統一された集団ではなく、自由に付いたり離れたりしながら、山の中を気ままに歩き回っている集団だということもわかるようになってきた。

また、ニホンザルの雄は、五、六歳ぐらいになると群れを出て、離れサルとして生活する。人間でいえば一八歳前後の年代だが、まるで放浪の旅に出るように、自由に山を歩き回り、勝手気ままな生活をするのである。そしてまた集団に戻りたくなったら、近くの群れに近づいていって、集団の一員になる。これはやはり修業とでもいった一種のトレーニングともみられ、風雪に耐え、夜の恐怖にも耐えて、一匹の強いサルになるための成長過程と考えられている。

再び群れに戻って、外敵に向かって威嚇いかくしたり、雌や子サルに信頼されるような存在になれば、このサルは、その集団のリーダーとして認められるようになるわけである。

三 鳥 類



写真1-12 抱卵するウミネコの群れ

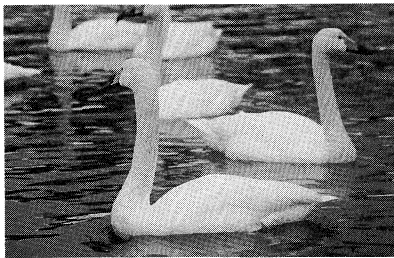


写真1-13 ハクチョウ

鳥の渡りの 下北半島では数多くの鳥類を見ることができ、中でも大間町は鳥の渡りの主要なコースの一つ
主要コース にあるため、実にさまざまな野鳥が飛来することで知られている。今、日本には二目六一科四
四〇種の鳥が生息するといわれ、下北では大体二〇〇種となるが、大間町ではそのほとんどを見ることができ
ばかりか、非常に珍しい鳥に出合う可能性があるのである。

その代表的な例としては、日本では一つしかないヤツガシラの標本だろう。このブッポウソウ目ヤツガシラ科
の鳥は、ユーラシア大陸・アフリカに広く分布する。日本には迷い鳥としてまれに飛来し、最近では長野県佐久
地方に少数繁殖しているのが確認されているほか、佐井
村では平成六年（一九九四）・七年・八年春に飛来して
いるのが確認されているが、標本となっている唯一のも
のは、大間崎灯台に衝突して落下したものである。いず
れにしても大間町は、下北に生息する野鳥ばかりでなく、
アフリカの迷い鳥までが訪れる稀有な場所ということが
できる。

北の海では珍しくないウミネコも、大間町の弁天島は
有名な繁殖地となっている。昭和二十年（一九四五）代

までは食用にするため卵が取り続けられ、その後は繁殖が見られなくなっていたが、昭和五十年代後半から再び確認されるようになり、日本野鳥の会による調査の始まった昭和六十年には三〇〇羽の繁殖が確認された。以後毎年のように増え続け、昭和六十一年五〇〇羽、平成元年には一万羽となり、平成二年から平成七年までは三万羽、平成八年春の調査では五万羽の繁殖が確認されている。ウミネコはカモメの一種で、春に飛来する。ほかに冬に来るカモメ七種の中で、オオセグロカモメは北方系であるため、日本では繁殖しないと考えられていたが、東通村尻屋の桑畑山の東側断崖で繁殖が確認されているほか、昭和六十二年に八〇羽の繁殖が弁天島で確認されたのをはじめ、平成八年春の調査では五〇〇〇羽の繁殖が確認されている。

また奥戸川にオオハクチョウが飛来するようになってから既に久しい。最初は五羽ほどだったのが昭和五十四年には二〇羽となり、以後、また減少した。このほか、昭和十一年以降、日本では見られなかったオオセツカが四十八年になって、津軽半島、六カ所村、秋田県の八郎潟に次いで、大間町でも見つけられている。

大間町で見られる鳥類 一口に鳥類といっても、爬虫類に近い阿比目から高等な燕雀目まで、さまざまに分類される。大間に掲げることではできないが、主なものを目科属別に列举してみよう。

阿比目アビ科アビ属ハシジロアビ・オオハム

管鼻目ミズナギドリ属ミズナギドリ科ハイイロミズナギドリ・ハシボソミズナギドリ

全ほく目ウ属ウ科ウミウ、ヒメウ

雁鴨目ガンカモ属ハクチョウ科オオハクチョウ

雁鴨目ガンカモ属マガモ科マガモ



写真1-14 マガモの群れ

鷺鷹目ワシタカ属イヌワシ科||イヌワシ

鷺鷹目ワシタカ属ハイタカ科||オオタカ・ハイタカ・ツミ

鶺鴒目キジ属キジ科||キタキジ・ヤマドリ

しぎ目シギ属アシギ科||アシシギ

鷓鴣目カモ属カモ科||セグロカモメ・オオセグロ・ウミネコ・ワシカモメ・

シロカモメ・ユリカモメ

梟鷹目フクロウ属コノハズク科||オオコノハズク・コノハズク

啄木鳥目キツツキ属アカゲラ科||アカゲラ・オオアカゲラ・コゲラ

燕雀目ヒバリ属ヒバリ科||ヒバリ

燕雀目ツバメ属ツバメ科||ツバメ

燕雀目イワツバメ属イワツバメ科||イワツバメ

燕雀目カラス属カラス科||ハシブトガラス・ハシボソガラス

燕雀目シジュウカラ属シジュウカラ科||シジュウカラ・ヤマガラ・コガラ・ヒガラ

燕雀目ツグミ属ツグミ科||トラツグミ・マミジロ・クロツグミ・シロハラ・アカハラ・ツグミ・マミチャジ

ナイ

以上、数えていくときりがながないが、ここでは挙げなかった鶴目ツル属ヒメクイナ科のヒメクイナや海雀目ウミスズメ属ウミガラス科のウミガラスやハシブト、杜げん目ホトトギス属ホトトギス科のカッコウ・ツツドリ・ホトトギス・ジュウイチなどは、大間町では皆おなじみの鳥であり、湿地に、山林に、そして海上に、その翼を広

げて本州最北端の地を飛び回っているのである。

四 魚介類

四季を通じて 大間町は津軽海峡と太平洋に面して、豊かな海産物に恵まれている。変化に富んだ潮流にはぐ豊かな海産物 くまれ、四季を通じて大量に捕獲される魚貝類については、第五章で詳述されるので、ここでは大間町の自然の中に生きる動物の一部として簡単に触れるだけにとどめよう。

ヤリイカ 大間周辺ではハルイカなどとも呼ばれるイカで、三月中旬から六月がその漁期である。

イカナゴ コウナゴ、コナゴと呼ばれる硬骨魚で、四月下旬から六月までに幼魚を捕って煮干しや佃煮にする。

スルメイカ 単にイカとかナツイカとか呼ばれるイ

カで、小型で肉が薄い。七月八月下旬が漁期である。

マダイ 五月から十二月までが漁期としてあるが、

最盛期は五・六・七月の三か月に絞られる。高

級魚だけに一本釣り・定置網・はえ縄などのさ

まざまな漁法がある。ほかに、クロダイ・イシ

ダイ・コブダイもいる。

アイナメ アブラメ、アブラコなどとも呼ばれ、三

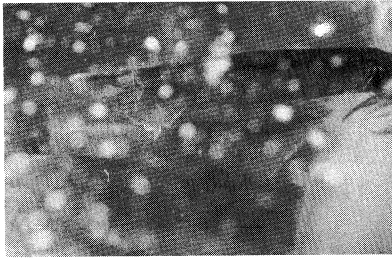


写真1-15 イカ

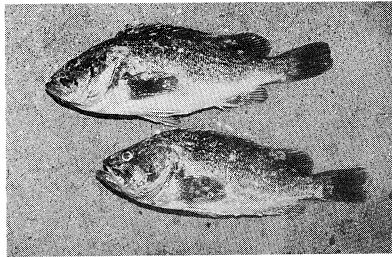


写真1-16 クロソイ

月から六月までが漁期。

スズキⅡ十月から十二月と、四月から六月の二回の漁期があり、定置網や一本釣りで捕獲する。

カレイⅡムシガレイ・イシガレイ・ナメタガレイなどさまざまな種類がある。ほかに、ヒダリクチ、テクイ、アオバなどと呼ばれるヒラメが主流で、年間を通して捕れる。

タコ類Ⅱシオダコ、イシダコ、マダコなどと呼ばれる各種のタコを、タル流しやヤス突きなどで捕獲する。

十月の下旬から五月ごろまでが漁期だが、最盛期は十一月から一月。

アワビⅡ大間町といえ、アワビといわれたほど、いいアワビが捕れたが、最近では乱獲によって、大型のものは少なくなつた。十一月一日から解禁となり、翌年の一月末日までが漁期となっている。

このほか、数え上げればきりが無いが、マス・ブリ・サメ・カサゴ・メバルなどの魚やマボヤ・イガイなどの貝類、そして沿岸の岩礁に豊富にあるムラサキウニなどが大間町の海の生き物である。

大間を北限と 昭和十年（一九三五）に大間尋常高等小学校の盛校長の編集によって発行された『大間教育・する海の動物 自力更生の原理』の中に、「大間を北限とする生物調査草稿」と題する一ページがある。ここでは魚介類の部分を、そのまま紹介しよう。

魚類Ⅱアミモンガラ・アカシタビラメ・アカカマス・イトヒキアジ・オホモンハタ・オニアジ・イカナゴ・カガミダヒ・キュウセン・クルマダヒ・トビウオ・キヌバリ・クサウオ・ハナオコゼ・ハヤコゼ・ヤナギノマイ・クサビマンボウ・ハリセンボン・ゲンロクダヒ・メアジ・マカジキ・タチウオ・メバチ・ゴマサバ・ゴンズイ・ノコギリザメ・ソウシハギ・ドチャウ

貝類Ⅱナツメガヒ・ナガイトカケ・ミガキボラ・ムシロガヒ・タモトガヒモドキ・イセヤウラク・ツノレイ

シ・レイシタマシ・エボヒメトクサガヒ・ホシタカラガヒ・ハナビラタカラガヒ・ミミスガヒ・オホタ
ニシ・ダンベイキサゴ・エビスガヒ・スカシガヒ・オキシジミ・ヤヘウメ・イセシラガヒ・エゾギンチャ
ク・ヒアフギ・ワシノハ・タマキガヒ・マガキ・シャジク・ナミマガシハ・クロタマキビ・トマキガヒ・
カガミガヒ・シラトリガヒ・サラサバイ・サルノカシラ・タカサゴビナ・コロモガヒ・スズメガヒ・カ
ラスノマクラ・ヒバリガヒ・アカザラ・ミミガヒ・マダカ・メガヒ・ウミスズメガヒ・ツタチガヒ・ペ
ルリヒダリマキマイマイ・オホスミリスカハマイマイ

第四節 大間町の植物

一 下北の植物相

ブナとヒバ 下北半島の植物と動物について長年、調査・研究を続けている森治氏によれば、日本のそれぞれが基本の林の地域の植物相は、植物の生育状況によって「ヤブツバキクラス」と「ブナクラス」に大きく分けられるが、下北半島は「ブナクラス」に入る。しかし、それは決してブナばかりというわけではなく、基本となるのがブナだということであり、下北半島の場合はブナの中にヒバ（ヒノキアスナロ）が入っているのが特徴であり、下北のごく基本的な森林といえば、ヒバ・ブナ林ということになる。

ところが、この二つの組み合わせばかりでもなく、このほかにさまざまな種類があることはいうまでもない。例えば、沢沿いの地域などでは、昔、マツチの軸木やゲタの材料などにしたサワグルミやトチ、カツラなどがあり、斜面の地域では、ミズナラ・コナラ・カシワのいわゆるドングリの三種類があり、北通りの地域では、特に海岸までミズナラが多く見られる。このほかイタヤカエデなどのモミジ類もあるが、これらの多くの種類はブナとヒバをベースにした森林の彩りとして存在するのである。

また海岸の植生を見ると、奥戸から材木に向かって坂を登っていく左側に広がるシナノキとエゾイタヤの林に、



写真1-17 ブナ

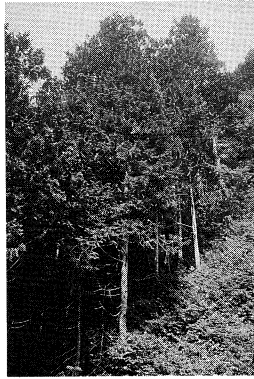


写真1-18 ヒバ

ギョウジャニンニクが見られる。これが日本海側の典型的な海岸の植生であり、アカマツとカシワ林とともに見慣れた林相を展開する。広大な原野の表情を見ると、ススキとワラビ、ヨシとタチギボウシの植生が特徴である。

森林とともに 自然のままの林相とは別に、人工の林も忘れてはなら**変わる植物** ない。人工造林は防風林や飛砂防林などの目的を持つ

たものもあるが、ヒノキアスナロを伐採して成長率のいいスギを植林するなど、森林生産の経済効率を高めようとするのが、これまでの主な目的であった。ほとんどスギが主流だが、気象・地形・土壌などの条件から、クロマツをはじめアカマツやカラマツも少し見られる。

下北ではスギは標高三〇〇メートルまでが適地といわれていたが、易国間川の奥の大石八森山の標高五〇〇メートルの場所にもスギが植林されたりして、従来の下北のありふれた林が人工林に変わった例はいくつもある。そして、林相が変わることによって、林の下の植物相も変わってくる。スギなどの人工林は、人がその中に入ってみればすぐわかるように、非常に暗く、日光が十分に入っていない。雑木林なら地面まで日光が入るので、林床が豊かだが、スギ林はやせていて、地面に育つさまざまな植物の対応性がなくなってくる。だから人工林からは、珍しい植物は、だんだんなくなっていくのである。

広葉樹の天然林なら、春に花を咲かせてから葉を展開し、秋には葉を落とすので、春から秋にかけては日光が

直接、地面に届くし、葉が茂っている間も木もれ日が入るようになってくる。だからさまざまな植物がその林の中に育つのである。例えばフキ・カタクリ・フクジュソウなどといった植物も花を先に咲かせ、その後葉を出すという準備ができる豊かな地面を必要とする。日光の通りにくい貧弱なスギ林のような地面では、これらの植物は育つことができないのである。

このようなことは、単に植物だけの問題ではなく、動物にも大きな影響を与える。動物は植物を食べて生きていくわけであり、多様な植物があれば、多様な動物がそこに生き、住みついていけることになる。貧弱な植物相の人工林の中では、その動物相も単純で貧弱なものになってしまふのである。そういう意味で、林とともに移り変わるのには植物ばかりでなく、動物もその法則に従うということがいえるであろう。

山地植生と 先に述べたように、下北半島の基本的な森林はブナとヒバだが、その構成にはさまざまな種類が**林相の構成** がある。炭を焼くために伐採されたブナ林が二次林としてミズナラが主体となり、さらにクリコナラの林へと移っていくように、天然の森林も次から次へと変化していく。そして大体、現在の下北半島の山地植生は、ミズナライタヤ林、ブナ・ミズナラ林、ブナ林、サワグルミトチ林、ヒノキアスナローブナ林と、人工林の林相に分けられる。そして、それぞれの森林は次のような構成となる。

- ① ミズナライタヤ林 Ⅱ この林は広く分布し、人家に近い場所にある雑木林は、大体この林相である。ミズナラをはじめ、エゾイタヤ、ベニイタヤが主体であることはもちろんだが、ヤマハンノキ・サクラ・カエデなどが混じっていて、低木にはツツジ・クロモジ・ウツギ類などがある。ツルものにはヤマブドウ・ミツバアケビ・サンカクヅル・ツタウルシが入り、地面にはキツネノボタン・キンミズヒキ・チゴユリ・トリアシ・ショウマ・イヌヨモギ・オオバタチツボスミレ、アキノキリンソウなどが育つ。

② プナーミズナラ林Ⅱ緩やかな斜面や尾根沿いに見られる林相であり、プナ・ミズナラを主体にハウチワカエデ・ウワミズザクラ・コバノトリネコなどが混じり、低木にはオオバクロモジ・ミネカエデ・ノリウツギなどがある。ツルものにはツタウルシ・ヤマブドウ・ツルアジサイ・イワガラミなどが入り、地面にはチゴユリ・マイズルソウ・ユキザサ・オクノカンスゲ・シシガシラ・シノブカグマ・オシダ・ヤマソテツ・イヌガンソク・ツルアリドウシ・スミレサイシンなどが育つ。

③ プナ林Ⅱプナの純林はカモシカライインの湯の川越しの峠などで見られるが、普通、ナナカマド・ハウチワカエデ・コバノトネリコ・ミネカエデなどが混じり、低木にはオオバクロモジ・オオカメノキ・ノリウツギ・ハイイヌガヤなどがある。ツルものにはツルアジサイ・ツタウルシなどが入り、地面にはユキザサ・チゴユリ・マイヅルソウ・ツルアリドウシ・アケボノシユスラン・シシガシラ・シノブカグマ・コケシノブ・エンレイソウ・ギンリョウソウ・ホソバノトウゲシバナなどが育つ。

④ サワグルミートチ林Ⅱ沢沿いの湿潤な地帯によく発達し、林床の植物の種類も多い。広く各地に分布し、サワグルミ・トチ・カツラを主体として、ベニイタヤ・オニイタヤ・ヤマハンノキ・ウワミズザクラ・シウリザクラなどが混じり、低木にはオオバクロモジ・キブシ・ウリノキ・オオカメノキ・ノリウツギ・ニワトコ・エゾアジサイ・ムラサキヤシオなどがある。ツルものにはヤマブドウ・サルナシ・マタタビ・ミヤママタタビ・ツルウメモドキ・サンカクヅル・ツルアジサイ・ツクウルシなどが入り、地面にはミヤマイラクサ・ムカゴイラクサ・タマブキ・ノブキ・アキタブキ・ヤグルマソウ・アカソ・アゼスゲ・ヨブスマソウ・オニシモツケ・タチアザミ・サワアザミ・エゾノヒレアザミ・ヤマブキシヨウマ・クジャクシダ・リョウメンシダ・ナライシダ・モミジガサ・ツリフネソウ・キツリフネなどが育つ。

⑤ ヒノキアスナローブナ林は下北半島の主体であるヒノキアスナローは、部分的に純林をなすこともあるが、沢沿い・斜面・尾根、その他広い範囲で混交する。ヒノキアスナロー・ブナを主体にミズナラ・トチ・カツラ・サワグルミが混じり、低木にはオオバクロモジ・オオカメノキ・ツノハシバミなどがある。ツルものには、ツルウメモドキ・ヤマブドウ・マタタビ・サルなしなどが入り、地面にはオクノカンスゲ・ホソバノトウゲシバ・ユキザサ・ナライシダ・オシダなどが育つ。

二 珍しい植物

二種類ある 下北半島は本州最北端に位置するだけに、珍しい植物も少なくない。大きく見れば、本州最北端**珍しい植物** がありながら、下北半島全体が日本海岸の要素を強く持った亜高山帯・高山帯を欠く温帯植物相といえるが、本格的なものでも高山植物と呼べるものもあり、かなり多彩な植物群がある。

珍しい植物は、ありふれた植物の中にあるものと、ありふれた植物が成立しない場所にあるものとの二種類に分けられるが、前者ではホテイランが挙げられる。下北半島のホテイランは、布袋ほてい様の腹部のような袋状の唇弁が付いていて、特にヒメホテイランと呼ばれる、唇弁の下に二本の距きょが少し見えるものがヒバ林の中で目立って美しい。しかしこの植物は、ヒバ林の上の方になると群生している場合があるササの地域では生きていくことができない植物で、最近ではヒバ林の減少や採集によって、年々減っている。

このほか、針葉樹の中に葉をキレギレに広げ、中から茎を立てて白い花を美しく咲かせるオサバグサがあり、これはヒメホテイランよりも水気が多い場所に見られる。また、最近ぐつと少なくなったオオサクラソウは、奥



写真1-19 ハマギク



写真1-20 ハナナス

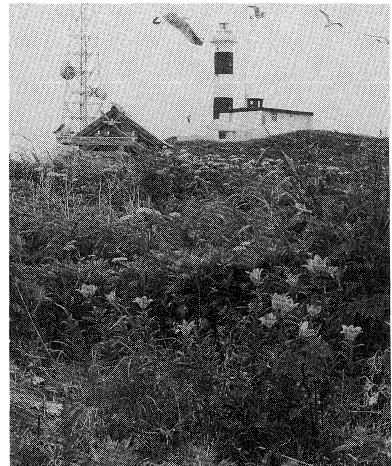


写真1-21 弁天島に咲くエゾスカシユリ

戸川の流域でまだ見かけることのできる貴重で珍しい植物である。

後者のありふれた植物層が成立しない場所に見られる珍しい植物には、まずシヤクナゲを挙げることができる。特に大間町の材木地区のシヤクナゲは、ピンク色をしていて、日本で一番美しいという評判があった。下北半島では恐山に非常にシヤクナゲが多いが、恐山も硫黄の影響で他の植物があまり生長できず、荒れた岩場であり、材木地区と同じ条件にある。

屏風立岩は 奥戸の屏風立岩^{びよぶだて}周辺は、春の美しい植物の宝庫として知られている。まず挙げられるのはユキワ

植物の宝庫 リソウで、下北半島では東通村尻屋桑畑山とこの二か所で見えることはできない。また、独

特の実を付けるエゾイヌナズナも北海道には広く分布しているものの、下北半島では佐井村の鑿掛岩^{ちぎかけ}（願掛岩）

とこの奥戸の屏風立岩の二か所にしかなく、よじれた実と白い花が特徴である。

屏風立岩には、ごくありふれた林の中に、先に述べたヒメホテイランの美しい姿があったり、いつも花を下に向けていて写真に写せないようなコアツモリソウがあったり、先端が岩に着くと、そこからまた根を生やしてクモの巣状に繁茂するクモノスシダを見かけたりすることができる。このクモノスシダは、かつては桑畑山や尻屋の石炭岩でも見ることができたものだが、今ではもう簡単に見ることのできない珍しい植物になっている。

下北半島の 高山植物群 先にも述べたように、下北半島には九〇〇メートルを超す高い山はなく、いわゆる本格的な高山植物というものは存在しないはずだが、いわゆる高山植物と呼ばれるものはかなりある。

縫道石山に見られるイワベンケイは、オスとメスが別株の高山植物で、夏に実を付けているものと実を付けていないで枯れてしまっているものがあったて、メス株とオス株との区別がつく。これは近くの大滝沢にもあるので、一塊のものと見えていいが、むつ市の釜臥山・屏風立岩にはない。しかし、尻屋の桑畑山にはまだ見ることができると高山植物である。

このように、場所によってあたりなかつたりするのが高山植物の特徴で、その代表のようにいわれているミヤマダイコンソウも、下北半島にはあるが八甲田山にはない。また、同じ種類なのに、場所が離れているために形態が違ふという高山植物もある。ミヤマザクラというサクラがそれで、例えば縫道石山のミヤマザクラには、メシベにきれいな毛が生えていて、これが典型的な特徴のはずだが、釜臥山のそれにはめつたに毛が生えてこない。それに縫道石山のミヤマザクラの花弁は丸いことになっているが、障子山しょうじのそれは、普通のサクラのようになちよつと窪みくぼみがあるなど、微妙なところで変わっている。いずれも、もともとは同じものだったのだろうが、ある程度の距離が離れることによって変化するのがわかる。

そしてミヤマザクラというと大木だという通念があるが、下北にはミヤマザクラの大木は発見されていない。

縫道石山などでは、岩の裂け目の土がたまっている場所に生えている低木であり、普通サクラの花というのは下から見上げるものであって、花も皆下を向いているが、この背丈の小さなミヤマザクラは、花が全部上を向いている。

また、もう一つ忘れてはならないものに、イワウメがある。佐井村福浦の福浦川の奥にある大滝で見かけられる素晴らしい高山植物で、昔は地図もなく、人が入れない場所といわれていたが、最近では林道が通り、比較的行きやすくなった。とはいっても、まだまだ非常な難所にある高山植物である。

氷河期から 以上のように眺めてみると、奥戸の屏風立岩周辺をはじめ下北半島には、珍しい植物の宝庫とい**つ**
生きる植物 てもいいほどの豊かな植物が存在する自然を持っているということがいえる。森林が成立しない

ような岩場にも、それなりの植物が生き残り、珍しい植物として私たちの前に姿を現してくれるからである。

例えば尻屋の桑畑山は岩場ばかりの山であり、極度に水はけが良くて乾燥する場所だし、ツツジが生えているぐらいで、上の方に行くともったく木がないといってもいいぐらいであるが、牛や馬に食われても回復力の強い植物が残ったり、あるいは牛や馬が食べない毒やトゲのある珍しい植物が残っている。毒があるものには、小さいひょうたんのような実が二つつながるヒョウタンボクという植物があり、葉っぱに銀色っぽい毛を生やし、黄色い花を付けるのでキンギンボクとも呼ばれている。

また、トゲがひどくて、へびでさえ嫌がるだろうという意味で名付けられたヒロハへビノボウズやジョミの類など、いくら食べられても次から次へと葉を出す植物もあり、毒があったり、トゲがあったり、回復力が非常に強いものが桑畑山には残されているのである。

珍しい植物と呼ばれるものの中には、北方の寒い地域の系統のものも多い。つまり氷河期の昔に南下してきて、

温暖化するに従って、さまざまな森林が形成されると同時に次第に消えてゆく宿命にあるが、そのまま生きていくためには、いくつかの条件が必要となってくる。北方系の植物は、冬には多少暖かくても生きていけるが、夏の高温には非常に弱く、春から夏にかけては、霧がかかったり、沢や滝から吹き上げるしぶきで冷涼な環境がなければ生きていくことができないのである。

そういう意味で奥戸の屏風立岩や縫道石山や桑畑山などは、夏には霧で覆われることが多く、沢や溪流や滝などからのしぶきによって、夏の高温をシャットアウトできるので、遠く氷河期の昔から変わらず元気で生きている植物が現在でも存在する。私たちは現代を生きながら、氷河時代の植物とも一緒に過ごすことのできる、素晴らしい下北の自然の中に生きているわけである。

三 海 藻

海の植物と 魚介類と同様に大間町の豊かな海産物の中で、海藻は重要な位置を占めているが、この海藻類に北限の海藻 ついても、第五章で詳しく触れることになるので、ここでは大間町の自然の中に生きる植物の一部として、簡単に記述するにとどめる。

コンブ 七月下旬から十月下旬まで、マンケ曳き、カギ採りなどによって採取され、操業者数は最も多い。

ワカメ 三月から八月下旬まで採集され、採集方法はカマ採りによるものが多い。

アマノリ 年間を通して採集され、採集方法はクシ採りである。

アカハタ 年間を通して採集され、採集方法はねじり採りである。

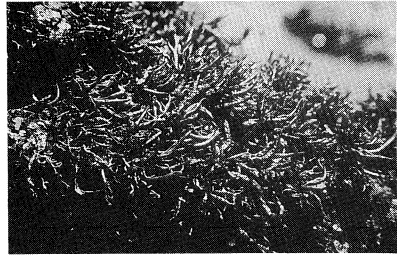


写真1-22 フノリ

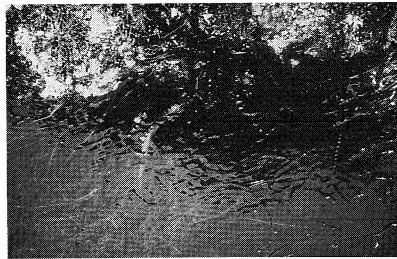


写真1-23 ワカメ

て採集される。

モズクは六月上旬から八月下旬まで、クマデ採り、ササラホク採りによって採集される。

以上、大間町の主な海藻類の漁期と漁具漁法を簡単に紹介したが、大間町に見られる海藻類には、もつとさまざまなものがある。先に魚介類の項でも紹介した『大間教育・自力更生の原理』の中から、大間町を北限とする生物調査の海藻類の部分だけを抜粋してみよう。

ポタンアオサ・ホソジユズモ・フサイワツタ・ハヒミル・ウルシグサ・ケウルシグサ・ツルモ・ジョロモク・ウミトラノオ・オホノリ・コトジツノマタ・トチャカ・ヒラコトデ・シキンノリ・カイノリ・イボノリ・ホソバノトサカモドキ・ユナ・トゲイギス・イシカニノオ・オホシコロ・イソムラサキ・アカモク・スメハノリ・シホクサ・ユヒキリ・トサカノリ

ツノマタは四月上旬から十一月中旬まで採集され、採集方法はササラホク採りである。

テングサは年間を通して採集され、これもササラホク採りによって行われる。

ヒジキは十二月上旬から四月下旬まで、マキリ採りによって採集される。

エゴノリは七月中旬から十月下旬までの三か月間に、クマデ採り、ねじり採りによって採集される。

フノリは十二月上旬から三月中旬まで、手採りによっ